

# 危機感からの学び

ながれ

川本 悠月 (かわもと ゆづき / 2022 年度インターン生)

昨年のちょうど夏、エシカルに興味を持った。母からアニマルウェルフェアに関する問題を聞いて衝撃を受けたことがきっかけだった。衝撃を受けたと同時に、自分が今まで知らなかったことに危機感を覚えた。そこでエシカルコンシェルジュ講座学生応援企画に申し込み、約半年間学んできた。

扱うテーマは様々で、気候変動をはじめ、動物福祉、食と農業、エシカルなまちづくり、教育、日本の人権問題、社会を動かすメッセージのつくりかた等、社会の様々な問題を考えていく上で大切なことばかりだった。

動物福祉（アニマルウェルフェア）と動物の権利（アニマルライツ）を学ぶ回ではケージ飼育されている鶏の映像を見た。日本では卵用の鶏の99%が狭いケージの中で飼育されている。鶏はほとんど身動きが取れず、金網に挟まったり、他の鶏に踏まれたりして骨折し、立てずに餓死してしまう。一緒のケージに入っている多くの鶏は死にゆく仲間を見ながら卵を産み続ける。とても悲惨で信じがたい光景であった。これらの鶏が生んだ卵が、日本のスーパーに並んでいる。鶏だけでなく、豚や牛も動物福祉が守られていない環境で育てられ屠畜されている。私たちが普段消費している商品には隠れていることがたくさんあり、知るきっかけすら少ないことに改めて気づかされた。鶏の映像を見てから、平飼いされていない鶏の卵や肉類を控えるというより、買えなくなった。日本は世界に比べ動物福祉が遅れており、なじみのない分野である。地球環境問題に向き合う上で脱肉食は重要なポイントであるという点も踏まえ、人々に現

実を知って、考えてもらいたい。

もう一つ、心に残っているのが、斎藤幸平さんの「個人の力だけでは環境危機を止めることは到底できない。それどころか、自分たちのやっている小さな努力で満足してしまったら構造的な問題から目をそらすことになってしまう。今まで通りの生活を続けるための免罪符として、SDGsを使っているのではないか。」という旨の言葉である（エシカル白書 2022～2023）。SDGsによる企業の戦略にはまらず、そして、自らもSDGsに甘えないためにはどうしたらよいかを考えることも大切だと気づかされた。

脱炭素社会に向けては大きな転換が必要であり、目先の利益ばかりを追求することをやめなければならない。また、全ての人たちが、問題に関心を持ち、行動に移せるような余裕のある社会に変えていくことも必要である。そう考えていたときに見つけたのがCSOラーニング制度であり、これに参加している団体の中でも政策提言等の活動を主に行っている環境文明21に興味を持った。環境に関する社会の現状やその他の問題について、多くのことを学んで考え、自分にできることを探っていきたいと考えている。

インターンシップが始まって2ヶ月、社会改革の難しさを目の当たりにしているところだが、毎回学べることが多く非常に勉強になっている。この先の活動も大いに楽しみであり、この貴重な体験を自分の力にすべく精一杯頑張っていきたい。